自給再考

グローバリゼーションの次は何か

西川 潤
関 曠野
吉田太郎
中島紀一
宇根 豊
結城登美雄
栗田和則
塩見直紀
山本和子
小泉浩郎

山崎農業研究所 編

農文協

はじめに――いまなぜ「自給」を問うのか

日本の食料自給率（三九％、二〇〇六年）が危機感をもって語られるようになっている。その背景には、世界的な穀物価格の高騰、中国ギョーザ事件などがあり、テレビや新聞、雑誌では、エネルギーや金融とともに世界の危機と呼ばれている。一方最近では、食と農と環境の密接な結びつき、暮らしの基本、地域の基盤としての農、さらには、グローバリゼーションがそれぞれの国の農業や環境、そして食生活に及ぼす影響などについて取り上げられる機会もふえている。

こうしたなか、私たちは「自給」についてあらためて問う必要があると考えた。私たちの問題意識は次の三点に要約される。一、マスコミを中心に語られている「食料危機」論に欠けているものはないか、危機の核心はどこにあるのか。二、産業としての「農業」は暮らしとしての「農」に支えられており、それゆえに「自給率」を論じる前に「自給」そのものの意味を広く深くとらえることが必要ではないか。三、「自給」を見直し育てる取組みが各地ではじまっている。そこから学ぶべきことは何か。

西川潤氏（早稲田大学名誉教授）は、現在の食料価格高騰と世界的な食料経済との関係、そして日本の農業への影響についての見取図を示している。関曠野氏（思想史家）は、論議されるべきは自給

でなくグローバル化した貿易であるとし、目下の食料危機はたんなる食料確保の問題ではなく、そこではエリートの世界貿易の論理と民衆の地域的自給の論理が鋭くぶつかり合っているという。吉田太郎氏（長野県農業大学校）は、人類史という長期的視点から考察し、ポスト石油時代の自給に求められるのは、地元の生態系や農民の知識に基づく持続可能な農業システムであり、人が自らの力で生きる能力（意欲、計画性、創造力）だと述べる。

中島紀一氏（茨城大学農学部）は、必要なのは近代という時代に区切りをつけるための自給論であるといい、ここ一〇年ほどの自給をめぐる政策を整理したうえで、食と農と自然をつなぐ有機農業論の展開の可能性を説く。宇根豊氏（農と自然の研究所）は、自給が食料の自給、とりわけ国家の食料自給に特化したところに今日の混乱の源があり、自給は近代化への対抗概念、原理主義としてとらえるべきだとし、その多様性について述べる。結城登美雄氏（民俗研究家）は、問われているのは食料自給率ではなく、食を支える人の力「食の自給力」だといい、自給する家族、農産物直売所で活躍する自給的農家、そして自給する村について語る。

栗田和則氏（山形県金山町、農林家）は、山里の暮らしの愉しさ、豊かさにふれ、消費の自給論、経済の自給論ではなく、創造の自給論が重要といい、塩見直紀氏（半農半X研究所）は、持続可能な小さな農を基盤に、得意なことや大好きなことを社会的に活かす、半農半Xという暮らし方が、農的・自給的感性が未来を拓くとする。山本和子氏（農業マーケティング研究所）は、食べ物の消費が「必要なものを経済的、効率的に考えながら食べる」あり方に変わることが、食料自給率の向上につなが

ると述べ、小泉浩郎氏（山崎農業研究所）は、「自給」の具体的実践が、各地に展開する「地産地消」だとし、「おいしい」「ありがとう」の対話が成り立つ人の和（信頼）と健康な土を基礎とする自然との輪（循環）こそグローバルスタンダードにと説く。

山崎農業研究所は、二〇〇〇年三月、『緊急提言　食料主権―暮らしの安全と安心のために―』を世に問うた。それから八年、食のみならず暮らしをめぐる状況は、グローバリゼーションの進展のもと、混迷の度合いを一層深めている。こうしたなか、声高に語られがちな「危機」の本質を「自給」から問い、「自給」を育てるなかから新しい時代を拓くことこそが、いま必要だと私たちは考えている。本書が、食と農と環境、そして地域について落ち着いて、腰を据えて考えるよりどころとなれば幸いである。

最後に、ご多忙のなか、原稿を書き下ろしてくださった執筆者の方々、ならびに出版の機会を与えていただいた農山漁村文化協会に厚く御礼申し上げる。

二〇〇八年一一月

山崎農業研究所 編集委員会代表　田口 均

［目次］

はじめに――いまなぜ「自給」を問うのか

世界の「食料危機」
――その背景と日本農業にとっての意味 ……西川潤 1

食料危機とその背景／世界の食料生産と需給状況／日本農業の現状と将来／結びに

貿易の論理 自給の論理 ……関曠野 23

論議さるべきは自給でなく貿易である／地域間貿易と遠隔地貿易／世界貿易の誕生／世界貿易の発展と近代国家の形成／世界貿易の衝撃が生み出した近代個人主義／アメリカ中心の世界貿易体制の完成／世界貿易の終焉

ポスト石油時代の食料自給を考える
——人類史の視点から……吉田太郎 37

母から子へと伝承していく食生活文化／狩猟・採取民は低学力のワーキング・プアか／毎日が日曜日だった狩猟・採取、原始農耕民族／エジプトとメソポタミアでなぜ農業が始まったのか／エネルギー面では効率の良い原始自給農業／脱石油化農業とアグロエコロジー／中南米で広まるカンペシーノ運動／原始時代とどちらが幸福か／教育格差の危機とダーウィン進化論

自然と結びあう農業を社会の基礎に取り戻したい
——自給論の時代的原点について考える……中島紀一 53

マルクスと自給論／三つの食料自給論／食と農と自然をつなぐ有機農業論の展開

「自給」は原理主義でありたい……宇根豊 73

犯人は誰だ（問題の所在）／原理主義としての「自給」／自然の自給／情感の自給／仕事の自給／生の自給／食べものの自給（決して食料自給ではなく）／国家自給率批判／ナショナリズムの自給

自給する家族・農家・村は問う …… 結城登美雄 91
「食は命の薬さ」／食料自給率三九％を支えているのは誰か／「自給的農家」の力が農産物直売所を生み出した／自立自給の村＝バッタリー村／自給の村を生き直す若者たち

自創自給の山里から …… 栗田和則 106
自創自給の愉しい農業／食の自給の延長／本藍で染める／手づくりのログハウスで／グリーン・ツーリズムの山里／山里文化の自創自給を／豊かさの自創自給

ライフスタイルとしての自給
——半農半Xという生き方と農的感性と …… 塩見直紀 121
田の草取りをしながら考えたこと／「この秋は　雨か嵐か」／自給と思索と／余った苗と土地と／人にはどれだけの土地が必要か／玄米と味噌と塩と／「自分の感受性くらい」／自給のある暮らし　半農半Xに至る道／バリ島モデル／和の国の戦略的自給について／「た・ね」として生きる／裏山の薪を明日の旅人のために

食べ方が変われば自給も変わる
——自給率向上も考えた「賢い消費」のススメ……山本和子 137
家庭でご飯を炊いて食べる人が増えてきた／米より食パンの伸びが大きい／生鮮食品の動向にみる価格に敏感な消費者たち／これからの農業の未来は明るい／畜産農家は残存者利益を狙え／格差社会の現実と直面する果樹農家／単純な「節約型消費」を一歩進め「自給率向上型消費」を／二酸化炭素排出量が一目でわかるラベル制度／自給率向上食品もラベル表示できないか／食べる人を巻き込んだ自給率向上運動を

輪（循環）の再生と和（信頼）の回復……小泉浩郎 150
自給を問う前に／自給とは生かされ生きること／「おいしい」「ありがとう」の交流／多様な展開／地産地消の現場／地産地消をグローバルスタンダードに

栗田和則　1944年山形県生まれ。山崎農業研究所会員。農林家。著書：『耕す日々』（共著、耕人舎、1985年）、『食料主権』（共著、山崎農研発行、農文協発売、2000年）、『十三戸のムラ輝く』（全国林業改良普及協会、2006年）など

塩見直紀　1965年京都府生まれ。半農半X研究所代表。著書：『半農半Xという生き方』（ソニー・マガジンズ、2003年。ソニー・マガジンズ新書として2008年復刊）、『綾部発 半農半Xな人生の歩き方88』（遊タイム出版、2007年）、『半農半Xの種を播く』（共編著、コモンズ、2007年）など

山本和子　1960年愛知県生まれ。山崎農業研究所会員。農業マーケティング研究所代表。著書：『ザ・サクセス女性の起業戦略』（共著、全国農業改良普及支援協会、1996年）、『がんばれ女性の食業起こし』（共著、農文協、1995年）、『窓を開けて』（共著、創樹社、1999年）など

小泉浩郎　1938年茨城県生まれ。山崎農業研究所事務局長。全国地産地消推進協議会幹事。著書：『田園型社会の展望』（共著、筑波書房、1987年）、『食料主権』（編著、山崎農研発行、農文協発売、2000年）、『21世紀水危機』（編著、山崎農研発行、農文協発売、2003年）など

◉著者紹介（執筆順）

西川 潤　1936年台湾台北市生まれ。早稲田大学名誉教授、早稲田大学台湾研究所顧問。著書：『人間のための経済学：開発と貧困を考える』（岩波書店、2000年）、『世界経済入門 第3版』（岩波新書、2004年）、『データブック 貧困』『データブック 人口』『データブック 食料』（いずれも岩波ブックレット、2008年）など

関 曠野　1944年東京都生まれ。思想史家。著書：『プラトンと資本主義』（北斗出版、1982年・改訂新版1996年）、『ハムレットの方へ』（北斗出版、1983年・改訂新版1995年）、『教育、死と抗う生命』（太郎次郎社、1995年）、『歴史の学び方について』（窓社、1997年）、『奴隷の国家』（ヒレア・ベロック著、訳・解説、太田出版、2000年）、『民族とは何か』（講談社新書、2001年）など

吉田太郎　1961年東京都生まれ。長野県農業大学校教授。著書：『有機農業が国を変えた』（コモンズ、2002年）、『200万都市が有機野菜で自給できるわけ』（2002年）、『1000万人が反グローバリズムで自給・自立できるわけ』（2004年）、『世界がキューバ医療を手本にするわけ』（2007年）、『世界がキューバの高学力に着目するわけ』（2008年、以上、築地書館）など

中島紀一　1947年埼玉県生まれ。山崎農業研究所会員。茨城大学農学部教授。著書：『有機農業運動の展開と地域形成』（共著、農文協、1998年）、『食べものと農業はおカネだけでは測れない』（コモンズ、2004年）、『戦後日本の食料・農業・農村 9 農業と環境』（共編著、農林統計協会、2005年）、『いのちと農の論理』（編著、コモンズ、2006年）など

宇根 豊　1950年長崎県生まれ。山崎農業研究所会員。NPO法人農と自然の研究所代表理事。著書：『減農薬のイネつくり』（農文協、1987年）、『「百姓仕事」が自然をつくる』（築地書館、2001年）、『国民のための百姓学』（家の光協会、2005年）、『天地有情の農学』（コモンズ、2007年）など

結城登美雄　1945年山形県生まれ。民俗研究家。著書：『山に暮らす海に生きる』（無明舎出版、1998年）、『東北を歩く』（新宿書房、2008年）、『スローフードな日本』（2002年）、『小さな村の「希望」を旅する』（2005年）、『いま、米と田んぼが面白い』（2007年）、『食の自治から暮らしの自治へ』（2008年、以上、共著、増刊現代農業）など

山崎農業研究所

1974年、故山崎不二夫東京大学名誉教授を中心に農業関係の研究者、技術者、教員、ジャーナリスト、農業者などさまざまな分野の有志によって設立。「農業・農村に関する研究・調査、活動支援、政策提言および関連情報の受発信を推進することにより、望ましい食料、農業、農村、環境のあり方を提起しながら、創造的で個性あふれる豊かな地域社会の形成に貢献すること」を目的とし、会員制研究所として現在、全国300余名の会員により運営している。

自給再考 グローバリゼーションの次は何か

2008年11月30日　第1刷発行
2009年 1 月31日　第2刷発行

編者　山崎農業研究所

発行　山崎農業研究所
郵便番号　160-0007　東京都新宿区荒木町15 サンシャトー四谷302
電話　03-5379-8039　FAX　03-5379-8039
URL　http://www.yamazaki-i.org/

発売　社団法人 農山漁村文化協会
郵便番号　107-8668　東京都港区赤坂7丁目6－1
電話　03-3585-1141(代表)　FAX　03-3589-1387
振替　00120-3-144478
URL　http://www.ruralnet.or.jp/

ISBN978-4-540-08295-5　制作／(株)新制作社
〈検印廃止〉　印刷・製本／第一企画(株)

©山崎農業研究所2008

定価はカバーに表示
Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

9784540082955

1920061015005

ISBN978-4-540-08295-5

C0061 ¥1500E

定価(本体1500円＋税)

自給再考

グローバリゼーションの次は何か